

福島原子力事故の対応は

高エネルギー物理学研究所  
(現高エネルギー加速器研究機構)名誉教授  
NPO法人 放射線安全フォーラム 理事長

加藤 和明

自然災害から見えてきたこと

今回の福島第一原子力発電所事故は、自然が引き金を引いて起きた災害ですが、人災の要素が見え隠れしている印象を持っています。この背景として、まず政治家、学者をはじめ国民各層にみられる学力低下が挙げられます。学力低下は知識のみならず、知識を知恵にするための考える力が、戦後教育の中で養われてこなかったことです。二つ目は国の制度が縦割りの設計になっていて、横のつながりがとりにくくなっていること。そして三つ目は過去の経験、つまり旧ソ連のチェルノブイリ事故、日本のJCO

東日本大震災により福島第一原子力発電所で被災事故が起き、放射性物質が大気中へ放出されている中で、環境影響が懸念されています。今回の事故はまだ収束をみていませんが、放射線防護の観点から事故対応をどのように受け止めているか、お聞かせください。

臨界事故に真に学ぶべきことがあったにもかかわらず学ぶことがなかったこと、これらが今回の事故で露呈されたと思います。

この三点がネックになって、日本国民が持つている力(パワー)を、このような緊急時にあっても十分に発揮できないでいるのだと思います。物事の当否・正誤は前提の置き方によって変化します。昨日は妥当な措置であつても、状況が変われば今日はそうでなくなることもありま

す。物事の性質は量によって変わります。量が質を変えれば、当然物事を進める順番が変わります。つまり、「平和時」と「緊急時」では、やるべき事の優先順位が変わるといふことです。

野戦病院では、トリアージ(フランス語)の考え方が実践されています。医師も看護師も人数が限られるため、どのような措置をしても助からない人、ちよつと手当すれば助かる人、後から措置しても間に合う人などに区別して、優先順位を付けた治療を行います。

このトリアージの考え方は、放射

線防護の世界にも、政治の世界にも、そしていかなる分野の世界にも通用し、また必要なことです。今回の福島原子力事故は、正に「緊急事態」ですが、残念ながら事故対応における優先順位付け、重要性の判断に首をかしげる場面が見受けられます。最も大事なことは、最高責任者が平常時から非常時への転換を宣言することです。しかし、今もって非常時宣言が発令されていませんので心を痛めています。

チェルノブイリ事故の経験学ばず

二五年前にチェルノブイリ事故が起きたとき、同様な事故が日本で起きたら処理ができるのか、と議論したことがあります。戦前、日本には神風特攻隊が存在して、今では考えられないことですが、個人の命を犠牲にしても国体を堅持する風潮の時代でした。今回の事故で、「想定外」という言葉が飛び交つてますが、その言葉で逃げるのではなく、想定外の事象に知恵を絞って対応するのが責任ある立場のリーダーらの責務だと思えます。

チェルノブイリ事故の教訓の一つは、情報の錯綜が混乱を招いたこと

緊急事態を強く認識し優先順位と重要性の判断を

# 放射線を浴びてもいたずらに怖がらない対応求む

です。島国の日本と異なり、欧州は陸続きでしたから、事故当初、放射能で汚れた牛乳は飲めない、放射能で汚れた食物は食べるななど、様々な国がまちまちな方針を示し、様々な判断をしたことで、大混乱になりました。

先に結論を言えば、当時の旧西ドイツ政府が率先して動きました。専門家を集めて情報の収集にあたり、その正確さなど質の吟味をして、その時点で最適とされる判断の下に必要な対応を決めたわけです。理由もなく食品の廃棄に走るのではなく、知恵を出し合い、最大限の努力を重ねて赤ん坊を危機から防ぎました。その結果、周辺国の混乱も収まっていききました。平和時と違って、極限状況の場合には、重要性を特定する判断が大事となります。ちよつとでも汚れたらきれいになければいけない、という平和時の教育一辺倒では、緊急事態を乗り越えることはできません。

一方、JCO事故の経験でいえば、関連の測定データ開示の遅れが指摘されました。中性子線量の測定データがすぐに明らかにされませんでした。結局のところ、測定データの質

を高めたいとの意図が働いて、データのチェックに何段階か入りが入り、公表が遅れたということでした。

緊急時には、質が多少悪くても早く出すことに価値あることが多々ありますので、今回の事故においても、JCO事故の学習効果が十分には反映されていないように思います。

## 多くのリスクを一度に経験

今回、われわれ日本人は、大地震、大津波、原子力事故、そして停電、断水などライフラインの遮断という命を失うことにつながりかねない様々なリスクを一度に経験しました。生きていること自体がリスクを抱えていることだと身をもって知りました。

今回、原子炉建屋内で働いていた人たちの中には、地震発生後暫くして、原子炉の状況がさらに悪化することも恐れられないから外に出るよう上司に言われ、外からは大きな余震や大津波が襲ってくる懸念があるから建屋内に留まるように求められて戸惑った人も居たことでしょうか。

「危険を避ける」というのは（人間を含め）全ての動物に共通する本能的な要求です。わが子の命を守るため「飲むな」と言われたのに飲ませ

たとしても、その親を責められるものではないと思います。

リスクという言葉の意味合いは、原子力安全の分野と放射線安全（防護）の分野で異なっています。原子力安全では、リスクを事故によって引き起こされる災害の大きさの期待値として捉えます。これに対して放射線安全というリスクは、放射線を浴びたとき身体に様々な作用が働いて、「影響が起こる可能性」を指します。放射線を浴びたからといって、すぐにそのまま影響につながるものはありません。時間が経てば、その期間のリスクは消えてしまうことになりません。

放射線は、どんなに少なくても、浴びたら身体に悪い影響を及ぼすので浴びないほうがよい、ということを強調する見解を見聞きすることが多々あります。このような言い方は、いたずらに放射線を怖がる、ひいては原子力を怖がることにつながるだけですので、適切な説明の仕方ではないと思います。

現時点で、放射性物質が環境に放出されているからといって、将来、住民に及ぶかもしれない健康への影響は心配するほどのものではないと

私は考えます。しかし、肝心の炉の内部が安定化したといえないので、その推移次第では、環境がより悪化することもありえます。今後、政府の発表やマスコミ報道に注意しながら、変化の先行きを見守る必要があります。

分かるということは自分自身が身につけた経験に照らして納得することです。とはいえ、自分自身で判断できないこともありえます。今回の福島原子力事故では、国民のほとんどがその状態にあると思います。安全は哲学の問題であり、安心というのは宗教につながる問題だと思えます。あの人が言うから「信じよう」という信頼関係の課題です。

高度に発展した社会に住むわれわれは、分業と特化でもって互いに助け合ってそれを維持していくことが不可欠です。自分の得意とする持ち分を受け持つて困難に対処していくことが肝要です。（三月三十一日記）